同じ空の下で

Lacune

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
同じ空の下で

【Ｎコード】
Ｎ８８２０Ｒ

【作者名】
Ｌａｃｕｎｅ

【あらすじ】
忘れないで　あなたが空を見上げるとき　私も同じ空の下で生きているってことを

―1―

人は　どれほどのことを積み重ねていけるのでしょう
そして　積み重ねたものにどれだけの価値があるのでしょう
時にはすべてが崩れてしまうこともある
時には何もかもが消え去ることもある
その時　私は前を見ていられるのでしょうか

それとも　もしかすると自分は
初めから何もなかったのかもしれないなと気づいた時
その時　私はまた歩き出すことができるのでしょうか

（2００3年8月2日）

「生きてゆく」
それだけをあなたは言いました
もっと飾る言葉はあったはずなのに
いくらでも付け加える言葉はあったはずなのに

あなたはそれだけを言いました

今となっては　あなたの言いたかったこと
あなたがこの言葉に込めた思いを確かめるすべはありません

でも　私はあの時
本当はわかっていたのかもしれません
呼びかける言葉はたくさんあったはずなのに　ただ黙っていた私は
本当はわかっていたのかもしれません

それとも　ただ口にする勇気がなかっただけなのか…

私は生きています　あなたの言葉どおりに
あなたの願いどおりではないかもしれないけれど

（２００３年８月６日）

踏みとどまるには　どれほどの強さがいるんだろう
受け入れるためには　どれだけ強くなればいいんだろう
勇気をふるうことは　時にはできるかもしれないけれど
強さを持ちつづけることは　勇気をふるうことよりもむずかしい

だけど　いつかあなたに会えたなら
もう一度　伝えなおすことができたなら
その時こそ胸を張ってこう言える

生きてゆくこと　それが強さなんだと

（２００３年１２月１９日）

「ねえ　わらってよ
そんな顔　しないでよ
巡り逢えたことを　喜んでよ

そして　ありがとう
出逢ってくれたこと　間に合ってくれたこと
ほんとうに　ありがとね」

（２００４年４月６日）

―2―

乗り換えを待ち合わせる駅のホームで
朝陽が見えるようになりました
暖かくなったし　いつしか季節は春です
立ち並ぶビルに映る朝の光は
まだ眠っている街を　優しく目覚めさせるかのよう
暖かくなった朝の空気は
この街に生きている人たちを　優しく励ますかのよう

あなたが好きだった夏はまだ先だけど
私はこうして電車を待ちながら　一日の始まりを待ちながら
毎日を生きています

たとえひとりでも　たとえ先は見えなくても

（２００４年４月１８日）

僕の言葉は意味を持たない
たとえどんなに飾ってみても　たとえどんなに叫んでみても
僕の言葉は意味を持たない
それでも歩きつづける僕を　君は笑うだろうか
それでも振り返らない僕を　君は忘れるだろうか

（２００４年４月３０日）

（疲れてるのかい）
信号待ちをしている僕に　誰かがささやいた
そうじゃないさと　僕は声のした方を見上げる
透きとおるような青い空は
迷いつづける僕の心をどこまでも見透かしていそうで
流れつづける白い雲は
いつまでも歩き出せない僕を静かに笑っているようで

「いつかは追いつくから」
僕はつぶやく
（誰も待ってやしないよ　ひとりで歩いてごらん）
風が応えた

信号が変わる　人混みが動き出す
僕はひとり　街なかへと歩き出した

「五月の晴れた空」

（２００４年５月９日）

自分だけができないことを探して傷つくよりも、
自分にしかできないことを見つけてください。

どんなに歩みが遅くても、それがつらいものであったとしても、
前を向いて歩こうとする姿は、何よりも素敵です。

（２００４年５月２３日）

―3―

またいつか　それはきっと
もう二度と　と同じ意味

でも
だから歩き出せることもある
すべてをわかって
微笑を返す優しさだってある

だけど　もしも願いがかなうなら
時が　もしもそれを許すなら

僕の
言葉のかけらだけでも伝えてくれないか
何もかもが消え去る　その前に

（200
4年6月4日）

「元気ですか」と　私は聞きました

でも　それを聞きたかったのは
きっとあなたの方でしょう
いつも　こんな私を心配していたのは
きっとあなたの方でしょう

人は
どれだけ他人から思われるかではなく
どれだけ他人を思いやれるかが大切なんだと
あなたは以前に言いました
「意味のある人生」とは　たぶん
自身に向ける言葉ではないんだとも
あなたは言いました

私は生きています
幸せだったのかも　意味があったのかもわからないけれど
それはきっと　小さなこと

だから　口にしたいのはひとつだけです
「元気ですか」

「元気ですか」

（２００４年７月１６日）

すべてを言葉にできるなら　君はあらゆる言葉を使うだろう
すべての気持ちを伝えられるなら　君は声の限り叫びつづけるだろう

でも
君の知る言葉は　君の心と比べてあまりに少なくて
君の届く声は　君の願いにはあまりに遠すぎて

（だけど　すべてに答えを出す必要なんてないんだよ）

君には　僕の声が聞こえていますか
僕がそばにいたことを　覚えていますか

「すべてを言葉にできるなら」

（２００４年９月１３日）

忘れないで
あなたが空を見上げるとき
私も同じ空の下で生きているってことを

覚えていて
時が流れても　すべてが変わってしまっても
あなたが生きた季節は　何よりも確かなものだってことを

「同じ空の下で」

（２００４年１１月１４日）

―４―

季節は秋になりました。
街並みをわたる風も、歩道を埋める落ち葉も、近い冬の訪れをそっとささやきます。
街や人が季節のように移りゆくものならば、同じように巡りくるものもあるのでしょう。
季節の背中を見つづけている私にも、そうあればいいのですが。

（２００４年１１月２０日）

この世界の片すみで生きていくことに　ささやかな願いを込めて
遠い空の彼方で生きているあなたに　心からの祈りを込めて

「願い」
（２００５年３月６日）

今日は暖かくなると思ったら　午後から寒くなり始めました
もうさよならの季節なのに　冬は名残り惜しがっているようです

（まだここにいるよ）
そうささやくように　そうつぶやくように
白い雪を降らせて　つめたい風を吹かせて

まだ　別れたくない誰かがいるんでしょうか
まだ　見守っていたい人がいるんでしょうか

けれど　そろそろじれったくなった春に
そっと背中を押されることでしょう
記憶を想い出に変えるために　優しい時の流れをつくるために
季節はめぐるものだから　時は移りゆくものだから

「めぐり
ゆく季節に」
（２００
５年３月１５日）

元気ですか

あなたに会えなくなって　２年の月日が過ぎました
声を聞くことも　便りを交わすこともないけれど
あなたのことだから　きっと元気にやっていることでしょう

私は相変わらずです
空ばかり見ているところも　明日に怯えるところも
時には立ち止まることもあるけれど
それでも私は元気です

また暑い季節が訪れました
夏が来てもあなたはいないけれど
それでも
いつかは会えるというのなら
いつかはその日が来るというのなら
その時は
ふたりで紅茶を御一緒しましょうか

あの頃のように

「時は流れても」

（200

5年7月16日）

―５―

私の言葉が意味を持たないのなら　私が在ることも無意味なのですか
届かない願いは　初めからなかったことと同じなのですか

（２００５年８月１０日）

「どうせ自分は…」
そうつぶやく君に　僕は何が言えただろう
明日を見失った君は　ひとりその胸にしまい込んで
誰よりも優しい君は　すべてを自分だけのせいにして

（でも　僕にとって君は
何よりも意味のあることだったんだよ）

君の瞳に映るものを　僕が見ることなんてできやしない
僕の願いなんて　君には何の意味もない

だけど

（地面ばかり見て泣かないで…）

君の空は　君が顔を上げないと見えはしないから
君の風は　君が窓を開けないと吹き抜けはしないから

「君の空」

（２００５年８月２０日）

「答えなんて　あるとは限らないんだよ」
わからなかったあなたの言葉

答えばかりを求めつづけて
どこかにあると　誰かが知っているはずと思いつづけて
いつしか　どんな問いだったのかさえ忘れていた

ようやくわかりかけたのは　あなたを失くしたあと
明日の見えない街を　ひとりさまよいつづけたあと

何が答えなのかは自分で決めていくんだね
そんなことさえわからなかった私だけど
あなたはきっと　こう言うでしょう

（それでも　君の明日はつづいている）

叶わなかった夢のかけらは　いつまでも
私の足元を照らしつづけてくれるから
過ぎ去った日々は　何よりも
今ここにいる私を勇気づけてくれるから

「いつまでも　何よりも」

（２００５年９月１３日）

「痛みに強いからって、痛みを感じてないわけじゃないんだよ」

（２００５年１１月７日）

―6―

強くなくてもいいんだよ
だけど

（地面ばかり見て泣かないで…）

（２００５年１１月１６日）

君の声を聞くのは　いったい何年ぶりだろう
受話器を通した君の声も　心を隠した僕の話し方も
あの頃と　何ひとつ変わりはしない
だけど
変わらないねと小さくつぶやいた君は
いったい何を感じとったんだろう

君の不意の電話の理由はわからない
君の声を聞くことができても　僕が受話器を置いたあとも

この世界は　何ひとつ変わるはずもない
だけど
僕には見えなくなっていた空が　いま
少しだけ見えた気がした

（ありがとう）
言葉にはできないけれど　心からそう思う
届かない願いにも　きっと意味はあるんだろう
僕が僕で在ることにも　何か意味はあるんだろう
元気でと　僕はそっと空につぶやいた

「言葉にはできなくても」
（２００５年１２月１３日）

今日は久しぶりに澄み切った青空が見えました
まだまだ寒い日が続くけれど　少しずつ陽射しは暖かくなっています
きっと　春もすぐそこで待っていることでしょう

あなたは今も空を見上げることがあるのでしょうか
いまさらだなんて　少し遅過ぎたかもしれないけれど
私はようやく　あなたが見ていたものがわかるようになりました

（生きてゆく中で　遅過ぎるなんて言葉はないさ）

風が暖かい

あなたがどうしているか　今の私にはわからないけれど
元気でいてくれるならそれでいいです
まだ明日の見えない私だけど
また空が見えるようになったから　きっと前を見て歩き出せます

あなたの見上げる空と　同じではないかもしれないけれど
あなたはもう　空を見てはいないかもしれないけれど

（２００６年０２月１１日）

今日はずっと雨模様です

いつも歩く通り道では　まだ桜が咲いていました
雨に打たれながら　それでも咲きつづける姿は
強いようでいて　どこか寂しそうです

…まだ頑張ってるんだね
（まだ春に気づかない人がいるからね）
でも　もうお別れの頃でしょう
（そう思うのは　君が歩きつづけているからだよ…）

こんなに小さな通り道でも冬が過ぎ　そして
春が過ぎてゆく
移りゆく毎日の中を　私は歩いています

迷いながらだけど　少しずつ変わっていく私を
過ぎゆく季節は気づいてくれているのでしょうか

「季節の通り道」

（２００６年０４月２０日）

―7―

心とは何ですか

画面の向こうで　日常のように繰り返される悲しい出来事に
少しずつ慣れてゆくのも人の心ですか
同じ空の下で　止むことなくつづく酷い出来事に
さりげなく他人事と言い聞かせるのも人の心なのですか

「灰色の空」
（２００６年０５月１８日）

たとえ世界中の誰もが目をそむけたとしても
いつかすべてが覆い尽くされてしまうとしても
それでも　せめて君だけは
この空の青さを忘れないでいてほしい
僕が在ったことに意味はないけれど

いつかすべては忘れ去られてしまうけれど
それでも　せめて君だけは
あの空の輝きを覚えていてほしい

そして　心から
いつまでも生きていてほしいんだ

「Ｒｅ：　灰色の空」
（２００６年０５月２４日）

元気ですか

雨や曇りがちな天気ばかりですが
お陰でそれほど暑くない日がつづいています
でも　もうしばらくすると
日差しの暑い夏がまたやってくるんでしょう

私は元気です
時にはうつむくこともあるけれど
朝には前を見ていられる毎日にできればいいんだよね

あなたなら　きっとそうしたはずだから

青空ばかりではないけれど
見上げれば　私の空はいつもそこにある
いつかあなたを忘れてしまう日が来るとしても
あなたが教えてくれたことは　いつまでも忘れはしないから

（２００６年０７月０９日）

（時が移りゆくことを　悲しむことなんてないさ）

そうだね
誰かの心が消え去っても　この空は少しも変わりはしない
私の想いがどこにも届かなくても　時は誰も待ちはしない
だから　悲しんだって何の意味もないんだろう

だけど

「少しくらいなら　泣いたっていいよね」

忘れないよ　あなたを見上げたこと

忘れないよ　あなたが好きだったあの空を

「忘れないよ」
（２００６年１０月０１日）

―8―

たとえ何の意味も無いことだとしても
遠すぎる空と　届くはずのない言葉しか持てなくても

（２００６年１２月１８日）

「ねえ、気づいてる？
君が高く伸ばしたその手も、
指先がふれているこの空気も、
君が見上げた青空と、いつもつながってるんだよ」

（２００６年１２月２７日）

「自分なんて」
あの時　君はそう言ったね
明日を探しつづけた君が　いつしかたどり着いたのは
そんな短く簡単で　どこか投げやりな言葉だった

そうだね
人それぞれの人生はとても小さくて　意味があるかどうかなんて
誰にもわからない
そのひとつがどう在っても　時には消えてしまったとしても
きっと　何も変わりはしないんだろう

それでも

（それでも意味はあるさ）

そうだよ
この広い世界を形づくるのも　この季節を感じとるのも
その小さなひとつひとつ
ひとつひとつの小さな出逢いや別れが　めぐる季節を紡いでゆく
たとえ　忘れ去られてゆくものだとしても

そうさ
たとえ逢えなくなっても　すべてが移り過ぎても
僕が見上げているのは　君が好きだったこの空なんだから

「この広い世界の片すみで」

（２００７年０２月１８日）

もしも涙が悲しみを洗い流すためのものなら
誰か　涙の流れ着く先を教えてください
澄んだ瞳も青空もいらないから
どうぞ　悲しみの帰る場所を教えてください

（２００７年０６月１６日）

―９―

ようやく梅雨が明けました
まだ曇りがちだけど　それでも
時折のぞかせるようになった青い空は
強い日差しとともに　季節の移り変わりを確かに感じさせます

でも

同じ季節が巡っているようだけど
空の色も　通り過ぎる風も
本当に同じものは何ひとつない
ただひとつ変わらないのは　すべてが変わりつづけてゆくということ

そう

立ち止まっても　歩きつづけても
それは誰しも訪れるものだというのなら
何も戸惑わなくたっていいのかな

過ぎゆく昨日も　まだ見ぬ明日も
何も怖れなくたっていいのかな

（２００７年０８月０４日）

変わらないものもあるさと　そう君に伝えられたなら
流れゆく時の中で　何一つ変わらないものもあると
いつか　そう君に伝えられたなら

（２００７年０９月０４日）

「ねえ　私はがんばったよね
少しも強くはなれなかったけど
それでも　私はがんばったよね

だから　ほめてくれるよね
自慢できるようなことは　何一つなかったけど

あなたなら　きっとほめてくれるよね

青い空には出逢えなくても
誰の心にも残ることはなくても
それでも

私は確かに生きてきたんだよね」

（２００７年０９月１３日）

すべてを言葉にはできないけれど　声にしたいことはいつもある
誰にも届かないかもしれないけれど　伝えたいことはいつもある

この空はどこまでも広くて
私なんて　ほんのちっぽけな存在でしかなくても
季節は振り返ることなく移りすぎて
私のことなんて　少しも気に留めることはなくても

ねえ

儚く砕け散って　ただの小さなかけらになってしまっても
私の心は　いつか誰かの元に届くかな

傷つき果てて　すりきれ果ててしまっても
それが私のかけらだって　誰か気づいてくれるかな

（２００７年１０月０３日）

―９―（後書き）

そろそろ終わりに近づいてきました
１０章まで投稿予定ですが　その先は決めていません

何より　誰に向けてのＭｓｇなのでしょうね

ひとり立ち止まっていては　伝える相手もいなくなってしまう
まだ振り返れば　幽かに見えるのかもしれないけれど

―10―

他人に見えないものが見える時　他人に見えるものが見えない時
そんな時は　誰しも立ち止まってしまうものでしょう
たとえ立ち止まる場所がなかったとしても

いつかは振り返ることもあるだろうと思いながら
今は前を見ていようと心に決めて
「どうせ自分は」と思いながら　それでも流れる雲の行き先が知りたくて
どうしてもあきらめ切れない自分が　いつもそこにいます

（また歩き出せるのはいつなんだろう）

そう自分では思っていても　いつしか人は
ひとりで歩き始めているのかもしれません

そんな自分に気づいてあげてください

「いつも、この場所から」

（２００７年１１月１８日）

街にも秋風が吹く季節になりました。

通り過ぎる街もすれ違う人もみな、秋の装いを始めています。
街であればあるほど、人は季節の移ろいを求めるものなのでしょう。
空も風も、そんな想いに気づいてくれているのでしょうか。

（２００７年１１月１８日）

いつも笑顔でいられたら　それはどんなに素敵なことだろう
いつでも強くいられたら　それはどんなに素晴らしいことだろう

だけど

ひとりで泣くことは　それだけでいけないことなのですか
弱さを持っていることは　それだけで悪いことなのですか

（２００７年１２月３０日）

立ち止まることに怯えるのも　歩き出すことを怖れるのも
それはきっと　私が前を見ているから

変わらないことを願うのも　変わりたいと願うのも
それはきっと　私が生きたいと願うから

（２００８年０１月２３日）

―11―

「ねえ　覚えてる？

どこまでも広がる青空を　ただ見上げていた時のことを
明日はいつまでも続いていくんだと　そう信じられた頃のことを

ねえ
あの空は　いまも変わらずに広がってるよ
あの頃のあなたは　いまもここにいるよ」

（２００８年５月２７日）

「ねえ
もしもこの空が　雲ひとつない青空ばかりだったなら

きっと
空の高さなんて　いつまでもわからなかったよね
空の広さにも　気づくことなんてなかったよね」

（２００８年７月５日）

この世界に　どんなに傷つき果てても
絶え間ない悲しみに　どんなに打ちのめされても

僕は　君に
心からの笑顔を見せてあげられたはずなのに

（２００８年１１月１８日）

そうだね
この世界は残酷で　苦痛に満ちて

子供じみた愚かさがあふれている
こんな世界に　いったいどんな価値があるというんだろう

だけど
この世界には　それでも優しさが生まれていて
たくさんの小さな命の瞬きが　途絶えることなく息づいている
それは
たとえささやかでも　たとえ儚いものだとしても

ねえ
こんな世界の中で　それは
とても素敵なことじゃない？

こんな世界だからこそ　それは
本当に素晴らしいことじゃない？

「この世界の中で」
（２００９年６月２日）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8820r/

同じ空の下で

2011年10月8日21時14分発行